

金澤町家の居室空間における土間特性に関する研究

－京町家との比較による考察と町家利用の提案－

日大生産工(院) ○高崎 智代 渡辺 康

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

金沢は、江戸時代より加賀百万石の政治、経済、文化の中心都市である。400年以上もの間、戦争の被害に遭わず、同時に大きな自然災害にも遭わなかったため、現在も当時の都市構造と歴史的遺産が色濃く残っている。また、それらの基盤を成す地形・自然が都市空間を豊かにし、日本が誇る多様な文化や伝統技術を生み出し、今日まで受け継がれており、京都も同様である。低層高密度で、土間空間が特徴的である点で金沢と京都の町家の共通点も多いが異なる点もある。

本研究では、町家の居室空間である居間・食事室・台所・水廻り空間と土間との関係性から、金澤町家と全国各地域の町家をもっとも先進的な町家として手本にした京町家とを同一住居種の地域間比較することで、居住空間における土間特性について考察し、修士設計において新しい低層高密度の住環境の提案を行うことを目的とする。

1-2. 町家の定義

町家という建築のかたちは、次のように定義される。

(1) 都市の商人の職住併用住宅であり、道に面するおもての部屋は、店として使われるため、おもての面に直接面して家が建つ。

(2) 隣どうし軒を接して建ち並ぶ。

(3) 隣どうしが軒を接して並んでいても、柱を共有することなく独立住宅である。

1-3. 金澤町家の定義

金澤町家とは、金沢市内で昭和25年の建築基準法施行以前に建築された伝統的構造・形態・意匠を有する木造建築物で、(1) 武士系住

宅 (2) 町家系住宅 (3) 近代和風住宅の総称を指す。

1-4. 土間の定義

土間は戸外と屋内の中間的な空間である。日本では屋内で靴を脱ぐ習慣があるが、土間では土足のままでも良い。作業場・炊事場としても使われている。町家においてはトオリニワとウラニワを繋ぐ通路的な存在である。

2. 研究の方法

2-1. 研究の対象

本研究では、金澤町家・京町家のうち、町家系住宅を対象とする。そして、居室空間である居間・食事室・台所・水廻り空間が平面図よりわかるものを以下の参考文献から抽出し、金沢では計30戸、京都では計47戸を研究対象とする。

金沢

- 『旧東のくるわー伝統的建造物群保存地区保存対策事業報告書』・・・3戸
- 『金沢市文化財紀要105-金沢の歴史的建築と町並み』・・・12戸
- 『金沢市文化財紀要57-金沢の歴史的建築』・・・5戸
- 『金沢市文化財紀要188-金沢市東山ひがし伝統的建造物群保存対策調査報告書』・・・10戸

京都

- 『町家探訪』・・・2戸
- 『京都府の民家-昭和44年度 京都市内町家調査報告書』・・・5戸
- 『八木地区の町家と町並み-南丹市八木町八木地区伝統的集落調査報告書』・・・1戸
- 『京都市内未指定文化財庭園調査報告書 第二冊 町家民家の調査』・・・27戸

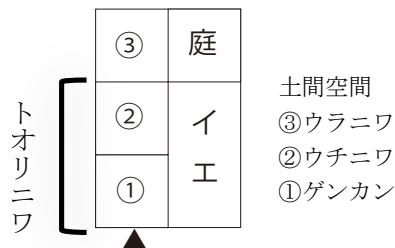
Study on dirt floor properties in the living room space of the Kanazawa house in the town

－ Suggestion of consideration and the house in the town use by the comparison with the Kyoto house in the town －

Tomoyo TAKASAKI, Yasushi WATANABE

- ・ 『祇園新橋-町なみ調査報告』・・・7戸
- ・ 『町家・共同研究』・・・2戸
- ・ 『京の町家』・・・3戸

2-2. 研究の方法



参照：島村昇（1983）『金沢の町家』奥村印刷

図2-2-1 町家の基本

図 2-2-1 に示すように、①ゲンカン②ウチニワ③ウラニワを土間空間とし、座敷・ミセと居室空間である居間・食事室が配置されている空間をイエ空間とし、町家の基本形式とする。このうち土間空間と居室空間の関係性から、土間特性について比較を行う。

3. 調査結果

3-1. 土間部分のかたちによる比較

土間部分とは、図2-2-1で示した①ゲンカン②ウチニワ③ウラニワの土間空間と、壁・屋根・窓によって閉鎖され、①②③の延長として建築化されたものとする。土間部分のかたちを図3-1-1に示すようにF型・L型・I型・ト型・踏込み土間型と設定し、土間部分のかたちについて比較する。

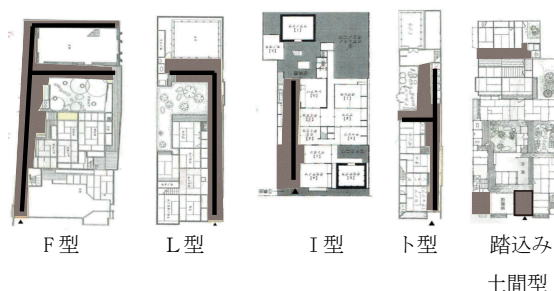


図 3-1-1 土間のかたち

金沢において、図 3-1-2 の結果から、I 型土間の割合がもっとも多いことがわかる。また、I 型・踏込み土間以外の土間のかたちが 54% となるため、I 型以外のかたちのものが発達していることがわかる。図 2-2-1 の土間空間以外の土間空間が壁・屋根・窓によって閉鎖

され建築化されていることがわかる。

京都において、図 3-1-3 の結果から、I 型土間の割合が 87% ともっとも多いため、図 2-2-1 の土間空間のみ建築化されているものが多いことがわかる。

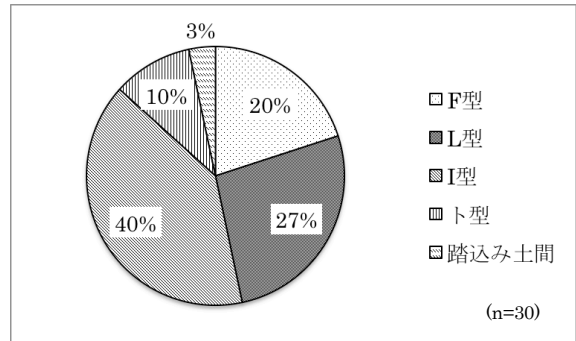


図 3-1-2 土間のかたち（金沢）

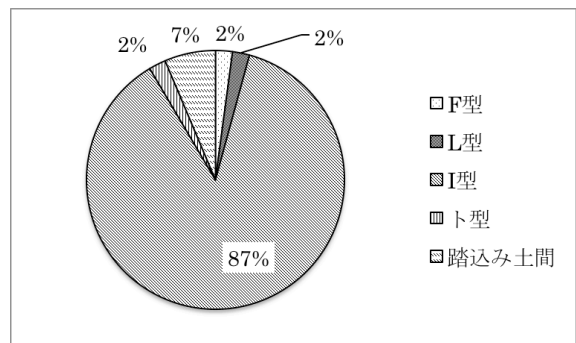


図 3-1-3 土間のかたち（京都）

3-2. 台所の位置と土間の関係による比較

図2-2-1で示した土間空間と台所の配置位置について比較する。独立した台所とは、台所が一つの室として独立し、土間空間とは戸によって仕切ることができるものを指している。

金沢において、図3-2-1の結果から、③ウラニワにあるものが多いため、ウラニワはサービスの機能をもつ土間空間であることがわかる。また、独立しているものが多いため、土間空間には住機能を配置しないことがわかる。

京都において、図3-2-2の結果から、②ウチニワにあるものが多いため、ウチニワの土間空間を台所スペースとして使うことがわかる。

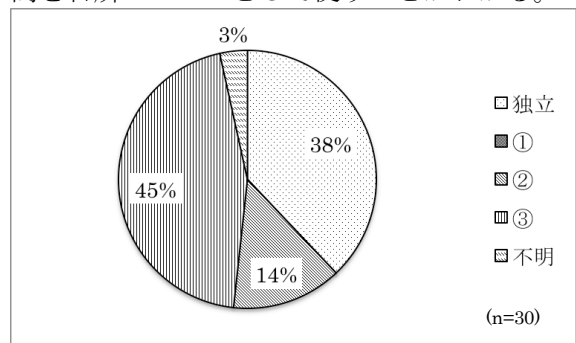


図3-2-1 台所と土間の関係（金沢）

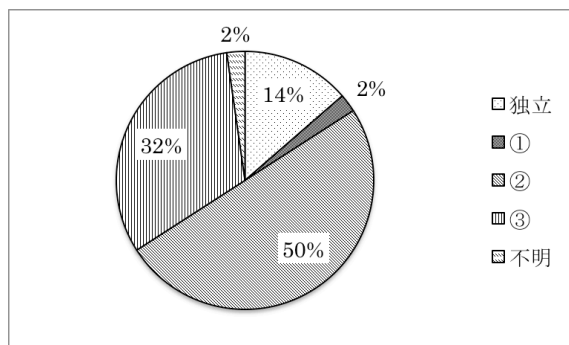


図3-2-2 台所と土間の関係 (京都) (n=47)

3-3. 水廻り空間とトオリニワの関係による比較

台所以外の浴室・洗面・洗濯場・トイレを水廻り空間とし、図2-2-1で示したトオリニワと、水廻り空間との関係について比較する。

金沢において、図3-3-1の結果から、水廻り空間が図2-2-1で示したトオリニワにあるものが77%と大半を占めている。水廻り空間はトオリニワの延長の土間部分である③ウラニワに配置されているため、ウラニワはサービスの機能をもつ土間空間であることがわかる。

京都において、図3-3-2の結果から、水廻り空間は図2-2-1トオリニワの延長上以外の土間部分に配置されている。京町家では、③ウラニワはトオリニワの延長としてではなく、独立して水廻り空間がある土間空間として配置され、金沢と同様にサービスの機能をもつ土間空間であることがわかる。

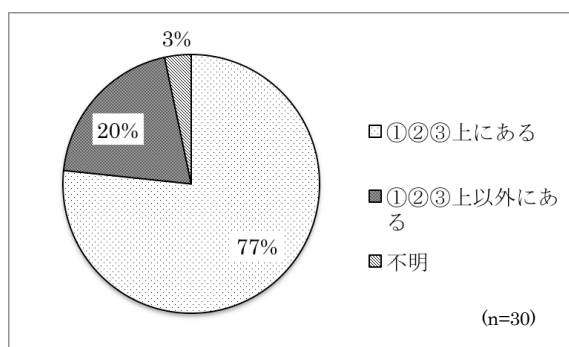


図3-3-1 水廻り空間とトオリニワの関係 (金沢)

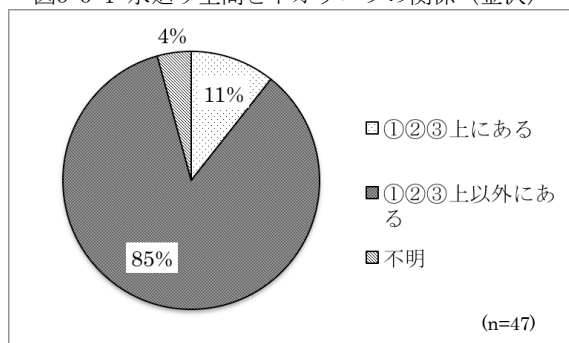


図3-3-2 水廻り空間とトオリニワの関係 (京都)

3-4. ウラニワのウチ・ソト関係による比較

水廻り空間があるウラニワのウチ・ソト関係について比較する。

金沢において、図3-4-1の結果から、水廻り空間前の土間空間はウチとして内部化されていることがわかる。これは、図2-2-1トオリニワの土間空間以外の土間空間もまた、トオリニワ同様に壁・屋根・窓によって閉鎖され建築化されていると言える。

京都において、図3-4-2の結果から、ウチとして内部化されているものがもっとも多いが、ソトとして内部化されていないものも多くあるため、ウラニワの土間空間が外部化されることが言える。

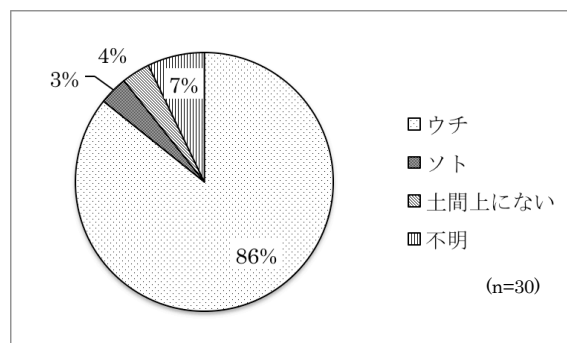


図3-4-1 水廻り空間前の土間の関係 (金沢)

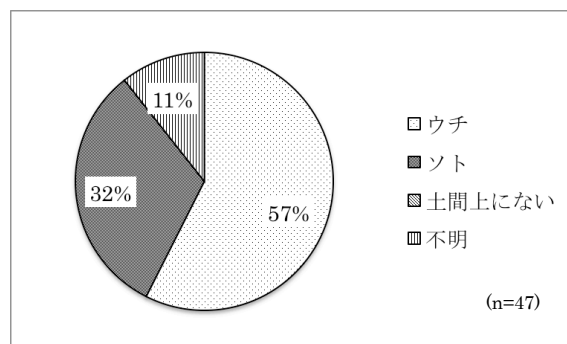


図3-4-2 水廻り空間前の土間の関係 (京都)

3-5. イエ空間と庭の間の土間空間の比較

図2-2-1で示したイエ空間と庭の間の土間空間について比較する。

金沢では、図3-5-1の結果から、土間空間が無いものも多いが、土間空間があるものが半数以上を占めていることがわかる。この土間空間は、積雪時において雪崩を防ぐ役割をもち、冬期のイエ空間を外部から守り、またイエ空間から土間空間への通路を獲得している。

京都では、図3-5-2の結果から、イエ空間と庭の間には、縁側はあるが、土間空間がほとんどないことがわかる。

これらの結果より、金沢におけるイエ空間と庭の間の土間空間は、多雨多雪の風土的要因により生まれた土間空間であることがわかる。

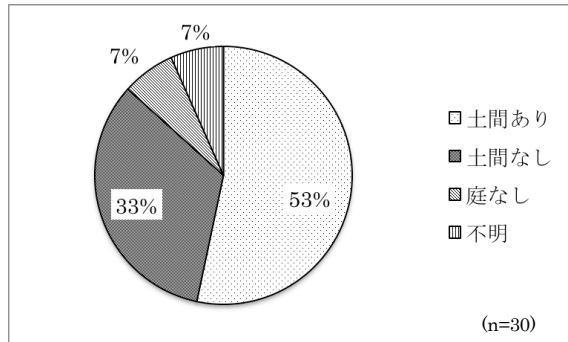


図3-5-1 イエ空間と土間の関係（金沢）

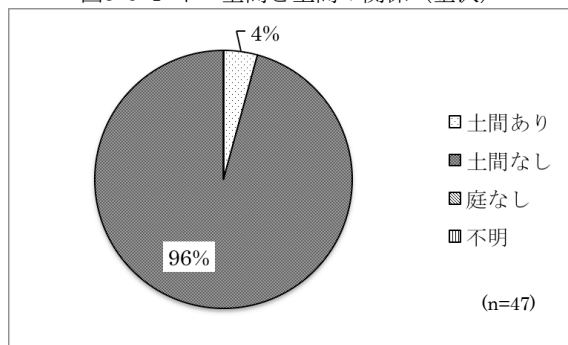


図3-5-2 イエ空間と土間の関係（京都）

4. まとめ

4-1. ②ウチニワに関して

金澤町家のウチニワは、台所が③ウラニワにあるため、通路的空間となる。したがって、金沢のトオリニワには、特定の機能をもたせていない純粋な土間空間であることがわかる。

京町家のウチニワには、台所が配置されている。京町家のウチニワはハシリ（走り）ともいわれ、井戸・流し・水屋などが設備される台所スペースの機能をもつと言える。

4-2. ③ウラニワに関して

金澤町家のウラニワには、台所・水廻り空間があるため、ウラニワは家事スペースを集約的に配置しているサービスの機能をもつ。また、ウラニワには屋根があり壁で囲まれているため、トオリニワの延長として建築化され、ウチ空間として扱われていると言える。

京町家のウラニワは、トオリニワの延長としてではなく、台所以外の水廻り空間があり、サービスの機能をもつ土間空間であると言える。また、外部化されソト空間となる住戸も多いた

め、ウラニワはオープンな土間空間として扱われている。

4-3. 土間空間全体として

金澤町家の土間空間は、京町家の土間空間に比べ、分化・多様化が著しいことがわかる。金沢では土間空間をウチとして扱い日常的に使う住機能を配置せず、冬期は土間を物干しなどの家事スペースとして、また、越冬のための燃料・食料の保存スペースとして使う。このことより、土間空間の役割は様々で、季節によって臨機応変にかたちも対応しており、本来の土間空間の延長や変形と言える。京都では土間空間はウチとソトを曖昧に繋ぐ役割をもち、土間も居間や食事室同様に、ウチニワは台所スペース、ウラニワは水廻り空間と、役割が明確である。これらの違いから、金澤町家は多雨多雪の風土的要因から生まれた金澤町家特有の土間特性をもつことがわかる。

5. 修士設計への応用

町家とは職住併用住宅である。かつて加賀友禅の染色工房が立ち並んでいた石川県金沢市里見町付近に金澤町家を生かした加賀友禅の工房・店舗を併用した低層高密の集合住宅を提案する。

「参考文献」

- 1) 金沢市教育委員会（1975）『旧東のくわー伝統的建造物群保存地区保存対策事業報告書』 金沢市教育委員会
- 2) 『金沢市文化財紀要105-金沢の歴史的建築と町並み』（1992）金沢市教育委員会 金沢市伝統的建造物・町並み調査会
- 3) 『金沢市文化財紀要57-金沢の歴史的建築』（1986）金沢市教育委員会
- 4) 『金沢市文化財紀要188-金沢市東山ひがし伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2002）金沢市教育委員会p. 41-51.
- 5) 藤島該治郎・藤島幸彦（1993）『町家探訪』学芸出版社
- 5) 『京都府の民家-昭和44年度 京都市内町家調査報告書』（1970）京都府教育委員会
- 6) 『八木地区の町家と町並み-南丹市八木町八木地区伝統的集落調査報告書』（2010）大場修
- 7) 『京都市内未指定文化財庭園調査報告書第二冊 町家民家の調査』（2013）京都市文化財事務局文化芸術都市推進室文化財保護課
- 8) 『祇園新橋町なみ調査報告』（1992）京都市都市計画局
- 9) 上田篤・土屋敦夫『町家・共同研究』（1975）鹿島出版会
- 10) 藤島該治郎・藤島幸彦（1993）『町家探訪』学芸出版社
- 11) 西川孟・杉本秀太郎・中村利則『京の町家』（1992）淡交社
- 12) 島村昇・鈴鹿幸雄（1971）『京の町家』鹿島出版会
- 13) 島村昇（1983）『金沢の町家』奥村印刷